

Title	神田孝一著 労働能率研究
Sub Title	
Author	園, 乾治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.1 (1923. 1) ,p.151- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230101-0151">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230101-0151</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

老練の人ならば、もつと分かり易く翻譯したかも知れぬと云ひ得る個處はあつても、まだ明かに原文の意味を謬り傳へて居ると云ひ得る個處には出逢つて居ないのである。(評者は Beer の英文が意外に讀むに易く譯するに難いものであることを此對校に由つて發見した。) たゞ些か失妥當不正確と思はれる譯語には二三心着いたのがある。例へばマルクスの資本主義進化に關する學說を紹介して、資本論の一節を引用した中に有名な「……資本主義的私有財産の死の鐘は鳴響く。酷使者が酷使されるのだ」(一九頁)と云ふ一節があるが、茲に謂ふ酷使者及び酷使の原語は Expropriateur 及び exproprié で評者は何時の頃よりか剝奪と云ふ文字を之に充てゝ居るが、高島山川諸氏の間には既に收奪の定譯語がある。これは嘗て他人の財産を奪つた資本家が、今度は自分が其財産を奪はれるの意味であるから、酷使では當らない。定譯語を踏襲するの容易にして且つ無難なるには如かぬので

ある。又細かい事を云へば前に引用したエツプ批評の文言の中に「英國の民主的國家構成に對する盲從的信仰」と云ふ句があつたが、此所謂盲從の原語は implicit であるから、寧ろ不言裡の信仰又は暗黙裡の信仰と云ふ程の意味ではないかと思ふ。併し斯ういふ風にして洗立てれば如何なる老大家の譯文中にも誤謬ある事は免れ得ない。右の如き指摘は決して本書全體の評價を動かすものでない事は特に明記して置き度いのである。右の外に固有名詞の發音に不正確と思はれるものがあるのに二三心着いた。元來外國の人名地名を我國の假名で表はすのには抑も始めから無理があるので評者も屢々過ちを犯して來たが、併し猶ほリーセスター (Leicester) ポールモール (Pall Mall) シモン・シトー (Jaures) 等には未だ改善の餘地があると思ふ。敢て斯る些事をも指摘するのは、譯者が本書を基礎として更に原著の全譯(中世の部分を除く)を公にすべきを約束して居られるからである。本書は現

形の儘でも既に充分識者の歡迎に値するものであるが、全譯の速かに完成せん事の更に一層望ましいことは言を俟たぬ。小島氏の努力を祈る所以である。(小泉信三)

神田孝一著 勞働能率研究

菊判 三百五十二頁  
定價 金三圓八十錢  
神田東條書店刊行

本書の著者神田孝一氏は工場管理法に關する經驗と學識とを兼備せる斯界の第一人者である。氏は人も知る如く大藏省專賣局にありて多數の女工を使備する煙草工場 of 管理實務に當り傍ら都下の諸校に於いて工場管理法の講座を擔當し、尙ほ激務の餘暇を以つて大著「實踐工場管理」並びに「日本工場法と勞働保護」の兩書を公刊せらる。前者に對しては既に世間に定評あり、繼令「國民經濟雜誌」がなしたる批評の同感すべきものなきにあらずとするも猶ほよく權威

たるを失はず、後者も亦我が國現行工場法の缺點短所を研覈し、これが革新改善の術策を擧示せる好著述である。茲に紹介せんとする「勞働能率研究」はその表題の示すが如く、工場管理問題の核心たる勞働能率に關するものであつて、前者に關聯せる特殊研究の成果である。

氏の學風は既に前者に於いて略これを窺ふことが出来るのであるが、吾人はこの「勞働能率研究」の冒頭の一章に於いても、その事物を正視する忠實なる態度の一斑を知ることが出来るのみならず、幾多の重要な啓示を蒙るのである。實に科學的管理法を生みたるものは資本主義的精神である。自由競争を原則とする現代産業界に於いて、最も多くの利潤を獲得せんがためには勢機械の使用、原料の消費、勞働の使役を合理化せんことを必要とする。この必要に應じて生れたるものが科學的管理法である。勞働は既に商品化せられてゐる。さうして勞働を更に機械化しやうとするのが勞働能率問題であ

る。換言すれば「如何にして最もよく労働を搾取すべき乎」この疑問が労働能率研究となるのである。それ故に「科學的管理法は理論としては、必らずしも労働能率と機械能率とを混同せるものにあらざるは言ふまでもなし。されどその實行に當りては、兎角に兩者を混同せる事情の下に組み立てらる」(第二六頁)のであり、「勞銀仕拂額の差別により、強烈なる能率的刺戟を従業員各個に與へんとするのであつて」(第二七頁)労働組合によつて屢々猛烈なる反抗が試みられた。「そのみならず、個人主義に基く極端なる能率増進の方法手段は、工場をして實際には極端なる生存競争場と化せしめ、その結果は科學的管理法の創案者の理想を裏切り、却つて協同一致、相互扶助の精神を喪失せしむるが故に、往々科學的管理法に對し、非人道的なりとの批難さへも起こるのである」(第二九頁)これ等の批は難科學的管理法の實際の有する缺陷であつて、畢竟これを生みたる資本主義的精神に歸せ

らるべきものである。然しながら子は必らずしも親と運命を共にすべきものではない。科學的管理法の理論に於ける特徴は、資本主義的精神と獨立してよくその生命を維持するに足るものがある。曰く産業管理の合理化、作業の標準化、課業の指定、適材適所の配置、機械其他の設備の改善、衛生設備の刷新、さうして業務編制の創設(第一七一―二五頁参照)等これである。これ等の特徴に基いて科學的管理法の生命は、社會が生産組織を必要とする限り、不朽であるであらう。

遮莫、本書の全體に亘りて他の容易に追従するを許さざる特徴は、隨所に利用せられたる實地研究の結果とその統計であらう。その範圍が單一種類の工場であることを以つて、批難を加へるものがあるかも知れないが、未だ徹底的調査行はれず、その結果の公表せられざる現在にありて、各方面より蒐集觀察せられたる多數の研究の成績と統計とは、尊重すべき苦心の結晶

であり、誇るべき本書の強味である。例を以つてすれば、労働時間を論じたる第五章に於いて次の一齣を見出す。(第一〇六一―一〇七頁)

費業のみに行はるゝ工業は、その従業者の多分は通勤により就業するが故に、就業始終の時刻は従業者の通勤に便否の差あるのみならず、始業時刻が冬季に於て早く、又た夏季に於て晚きは、共に従業者の能率を高める所以でないのであつて、晝業の就業時間が、九時間乃至十時間の場合には、就業始終の時刻は、その労働時間并に休憩時間の配置と相俟つて、實驗的研究を要せらる。東京專賣局工場に於て、就業時間十時間、休憩時間一時間、午前七時始業午後五時終業を、大正十年冬季の四ヶ月に限り、試みに就業時間を九時間四十分、休憩時間一時間、午前七時三十分始業午後五時三十分終業に改めたる實驗によれば、正味労働時間は二十分短縮せるに拘らず、作業能率は却つて高められ、而かも前年の冬季に比し左記の著明なる得益を發見したのである。

- 一 遅刻者の著しき減少
- 二 缺勤者の減少
- 三 勉勵賞給與額の増加
- 四 勞銀所得額の増加

以上は始業及び終業時間に關するものであるが、本書は時事問題の解決に對しても暗示に富むのである。例へば屢々論究せらるゝ、「八時間労働」及び「週休問題」につきて本書は如何なる結論を下すか。それに就いては、同じ章の「時間の配置と能率の波動」を論ずる一節に於いて、次の如く言ふ。(第一二四―一二六頁)

東京專賣局工場に於ける最終作業たる巻煙草仕上(手工)作業の日給女工(勞銀刺戟の少き者)に就き調査したる成績に徴すれば、一日正味労働時間を九時間として、正午休憩四十分、午前午後休憩十分づゝの場合には、右の圖表(2)に示す如く、一日中の朝掛けが能率最も低く、三時間目(休憩を含む時間)の休憩前には午前中の最高能率を現はし、休憩後に於ては能率は一時低下するも、休憩による倦怠と疲労の恢復は漸次能率を上昇しつゝ、午食休憩時間に及ぶのである。午後に至りては三時間目(休憩を含む時間)に於て一日中の最高能率を示し、休憩後は漸次低くなり五時間目には急に低下する。さらに午前と午後との能率よりも高いのである。かくて労働時間と休憩時間との配置を變更せざる場合に於ては、四季を通じて、

の能率定型は著しき差異なきを見る。

以上は正味労働時間を九時間とせる場合の能率曲線の定型なるが、さらに労働時間を一時間だけ午後に加えて増し、午前は四時間半、午後を五時間半とし、就業時間の配置を變更するときは、前の定型は著しき變化を生じ、前には午後の休憩後は一日中の最高を示せるに拘らず著しく下降し、一日中の最高率は午前の休憩後に移る。而して是等の能率曲線の異動に就き特に注意を要するは定時間の最終に一時間だけ労働時間が増されたる爲め、午後の休憩後の能率も午前の休憩後の能率も共に低下し、殊に九時間目よりの低下は急速度を示せること及び一日中の能率波動の高低差は労働時間一時間の延長によりて増大の傾向を示し、一日一時間當出來高は、労働時間一時間の増加によりて著しく低下するのである。

是等の實驗に徴するときは、女にありては正味労働十時間以上なるは、如何なる輕易の作業にても過長の嫌あり、數ヶ月に亘りて繼續するときは遂には疲労の影響を受け、時間増加は一日中の出來高を増加する所以とならず、却つて遅刻者缺勤者を多くし、總生産高を減少する所以となる。然らば正味労働時間は、多分の女工に對しては八時間を適當とするか、九時間を可とするかは、その作業の種類に因り、通勤と寄宿との差もあり、さらに訓練の良否にも關し、一概に斷定を下すを得ざるし、

い。然しながら氏に於いては、結論は奇異なるが故に貴しとするにあらで、寧ろ平凡なる結論に到達する各般の實際的經驗調査を尊ぶべきではあるまいか。以上は單に一二の例を示したに過ぎない。これと同様に價値多き文字は、本書の前後十章、労働能率、作業形態、労働類別、労働移動、労働時間、労働選擇、労働訓練、労働衛生、労働厚生、労働報酬の全篇各所に於いてこれを見出すことが出来る。

本書はもと專賣創始二十五年を記念せんがために本年二月稿を起されし由であるが、洵に好個の出版であつて、氏の力に俟つにあらざれば、何日に至るもかくの如き好記念物は完成せられ難いであらう。寡聞敢て稍長き引照を試みたるは、學界のためにその公刊を慶賀し、併せて汎く工業實務家並びに工業政策研究者に勧めむとする微意に出づる。

園 乾 治

(中略) 一般工場に於ては相當訓練を経たる男工に對しては正味労働九時間位、同じく訓練を経たる女工に對しては正味労働八時間位とし、前に述ぶる如く休憩時間は正午四十分乃至一時間、午前午後の休憩時間は各十分乃至十五分とするところが、多分の作業に於ては先づ相當なるを見る。

以上述ぶる所は一日中の各時間に於ける労働能率の波動を示せるものなるが、能率は一週間の各日に於ても同様の曲線を作る。一日九時間労働六日間就業、日曜休日の場合に於ては第一日即ち休日の翌日が一週中の最低能率を示し、日を経るに従ひ上進し、四日目又は五日目に一週中の最高率に達し、それより降つて六日目の最終日に及ぶことは、先づ本邦に於ける手工作業(男女)の能率の定型と見らる。然るに若しも七日或は八日と就業日を繼續するときは、その最高に達するは概ね五日目であるが、六日目よりの能率下降の度合が強きを加ふることは、恰も前の労働時間増加の場合に、八時間乃至九時間目の能率下降度合の強きと相似たるものがある。それ故労働時間が漸く濃化せられつゝある我國多分の工場にては、毎月二回乃至三回の休日にては少きに過ぐるの感がある。矢張り一週一回の日曜に正確に休日とすることは如何なる作業にても、亦た男女を問はず相當なりと思はる。

斯くの如き結論は決して奇異とするに足りな

### 岩波哲學辭典

四六倍判 一二〇四頁  
定價 金拾八圓

岩波書店發行

洵に福田博士の言はれし如く「凡そ一科の學を修むるに必ず欲しきものは善き辭典と善き雜誌と善き全集となり。」其の殆ど凡てが思索に負ふ哲學の領域にありても尙ほ紀平博士と共にアイヌラーの「二種の哲學辭典は我等の座右を離すことのない書物である」ことを告白せざるを得ないであらう。同文館が會て「大日本百科辭書」の一つとして「經濟大辭書」其の他に共に「哲學大辭書」を公にして以來既に十年の歲月を閲した。其の間、學問の進歩は哲學の領域にありても亦著しき變化の跡を認めしむるものがある。今や幾多の新學語は舊き辭書をして其の欠陥を曝露せしめつゝある。舊辭書に根本的補訂の施されざる限り新書の出づべきは當然である。岩波書店則ち茲に顧る所あり、宮本和吉、